

浄土

monthly JODO

2015
July
August

7/8



小皿

南
初枝
の作品
陶芸家

紀元前に遡れば、いま食の器として考えられているすべてのものは、まず祭祀の器としてあった。「器」という文字は「口」と「大」という二文字の組み合わせで構成されているが、旧字体では、大は犬と書かれていたのである。犬は祭祀に欠かせないものであった。

さて、皿である。皿は、料理を乗せるものとしてもっとも基本的なものと考えられている。形は様々で、汁気の少ないもののためには浅いものを、汁気の多いもののためには中央のくぼみが比較深いものを使う。

料理を盛り付けるための比較的大きな「盛り皿」と、自分用にわけて取るための「取り皿」（小皿）とがある。さらに、醤油や薬味などを入れて用いるためのもっと小さい皿（醤油皿や薬味皿など）もある。

今月は銘々皿。矢舩の大胆なデザイン的紋様が作者の特徴である。

撮影・芝崎慶三

浄土

2015/7・8月号 目次

連載 法然上人のお言葉⑭	梶村 昇	英訳 河西良治	2
講演概録『法然上人の仏教に生きる』	梶田真章		4
連載 会いたい人 春風亭小朝さん②	関 容子		14
連載 響流十方	小村正孝		22
連載 東日本大震災の被災地を訪れて④	成田淳教		26
連載 友好の絆 2	森 清鑑		30
連載小説 渡辺海旭⑤⑨	前田和男		36
連載 誌上句会	選者＝増田河郎子		44
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう		47
編集後記			48

表紙・陶芸家 南初枝の作品

表紙裏＝表紙の言葉

裏表紙裏＝仏教歳時記



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

ご法語

ただひとすゝにわが身の善惡をかえりみず、決定往生せんとおもいて申すを他力の念仏という。たとえば麒麟の尾につきたる蠅ばえの、ひとはねに千里をかけり、…おおきなる石をふねにいれつれば、時のほどにむかいのきしにとづくがごとし。またくこれ石のちからにはあらず。ふねのちからなり。それがように、われらがちからにてはなし、阿弥陀ほとけの御ちからなり。これすなわち他力なり。

(念仏往生要義抄)

Honen Shonin's Sayings

The nembutsu that we utter single-mindedly without reflecting on our own good and evil while having a firm belief that we can be born in the Pure Land is called the nembutsu by the Other Power. It is as if a fly on the tail of a kylin (a mythical composite animal) were blown away a thousand ri (*ri* = about 3.92km) with a swishing of its tail,..., or as if big stones on board a ship reached the opposite shore in due course. The stones arrive there due to the power of the ship, but not to their own. Similarly, the birth in the Pure Land is not at all realized by our own powers, but by the Power of Amida Buddha. This is just the Other Power. (*Nembutsu Ojo Yogi Sho*)

法然上人のお言葉

現代語訳―ただひとすじに、わが身の善悪を顧みることなく、必ず極楽に生まれることができると思つて称えるのを他力の念仏という。たとえば麒麟の尾についた蠅が、一振りて千里も飛んでいき、…大きな石を船に乗せれば、時間がくれば、向う岸に到着するようなものである。まったくこれは石の力ではなく、舟の力によつたものである。そのように往生もわれらの力ではなく、阿弥陀仏のお力によるものである。これが他力である。

解説

この話の後に、自力とは何かという問いがあり、それは煩惱具足の身が、煩惱を断じて、悟を開こうとするもので、それは大海を芥子の柄杓で汲み尽そうとするようなものだと言います。高野聖の創始者である明遍(1142-1214)は、法然上人に「念仏を申しているときに、妄念が起るのですが、どうしたらよいでしょう」と尋ねますと、上人は「妄念が起ることも、阿弥陀仏の本願のお力で往生するのです。妄念を起さずに念仏を申そうというのは、生まれつきある目鼻を取り捨てて称えようとするようなものだ」と言つたといひます。

Commentary

This story is followed by the question of what our own powers are. Honen answered it by explaining that we, seized with our earthly desires, tried to give them up and achieve our spiritual enlightenment by our own powers, which was as if we had attempted to exhaust all water from an ocean with a scoop as tiny as a poppy seed. Myohen (1142-1214), the founder of Koya Hijiri (Mt. Koya Missionary), said to Honen, "There occur distracting thoughts in my mind while I am uttering the nembutsu. What should I do?" Then Honen is said to have replied, "Even if they occurred, you would go to the Pure Land thanks to the Power of Amida Buddha's Original Vow. Trying to utter the nembutsu without any distracting ideas occurring is like trying to utter it after casting aside eyes and a nose you are born with."

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

■講演概録■

法然上人の
仏教に生きる

第三回

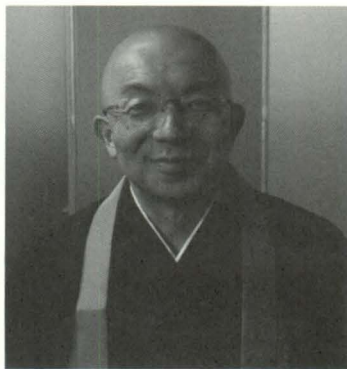
京都・法然院貫主

梶田真章

法然上人は「ただ心の善惡をも、かへりみず、罪のかるき、おもきをも、沙汰せず、心に往生せんと、おもひて、口に南無阿弥陀仏となへては、声につきて決定往生のおもひをなすべし。その決定心によりて、すなはち往生の業は、さだまるなり」と説かれました。

善人でも悪人でも、心に往生したいと思って、口に南無阿弥陀仏と唱えていると、その「南無阿弥陀仏」の自分の声に従って、これで必ず往生できるんだという思いが深まっていく、とおっしゃっているんですね。「南無阿弥陀仏」を唱え続けていると信心が後から付いてくる、という訳です。こんな私でも仏になれるんだという信心が段々と育っていく。ただ「南無阿弥陀仏」を唱えよ、というのが法然上人の教えになります。私は信心なんか定まりませんとおっしゃる方、あるいは、いきなり、ただ信じれば良いという方がいらつしゃいますが、念仏を唱えないと信心は定まらないよと法然上人はおっしゃっているのです。念仏を唱えないと他力の信心は育ってまいりません。念仏を相續してゆくと、声につきて、段々これで往生できるといふ安心感が私の中に育っていくのだということを「心に往生せんと、おもひて、口に南無阿弥陀仏となへては、声につきて決定往生のおもひをなすべし」と示されているのです。念仏を唱えないと信心が深まってゆかない、育ってゆかない。だからただ「南無阿弥陀仏」を唱えよ、ということになります。

更に信心について申し上げますと「初めには我が身のほどを信じ、後には仏の願を信ずる」のです。我が身のほどを問えば、自分自身は凡夫であり、悪人である。その悪人である私のためにこそ阿弥陀



仏の本願があるという風に信じてまいります。最初から阿弥陀仏の本願が信じられるということではありません。私は悪人で愚か者と信じたときに、こんな私のために阿弥陀仏が、どんな人間でも仏にするという願いを起こされたのだという信心が定まる。これを浄土宗では難しくは「信機」・「信法」といまして、まずは自分の機を信じまして、凡夫だと信じまして、この私のために阿弥陀仏の本願という教えがあると信じるのが法を信ずる。最初から本願という法を信じるのではなくて、自分をまず問う、自分は悪人だ、凡夫だ、愚か者だと問うことで、阿弥陀仏の本願、どんな人間でも仏にするという願いは私にとって有難いという信心が定まってゆく。これを強調したのが他力本願念仏です。これをおっしゃったのも中国の善導大師でございます。まず己を悪人だ、凡夫だと信じ（悪人というのはきつい言葉ですから、これが嫌な方は凡夫で十分でございます）、現代は御自身を悪人だと思っている方は殆どいらつしやいませんが、法然上人・親鸞聖人の時代、八百年前の悪人は、簡単に言うのと、善悪ではなくて、損得で生きている人間ということです。得すると思ったら何をするかわからない、損することは善いことであってもなかなかやる気にならない、それが私達じゃないかということです。私達は善悪ではなく損得で生きている愚かな人じゃないかということ。八百年前に問うたのが法然上人、親鸞聖人でした。「初めには我が身を信じ、後には仏の願を信ずるなり」。煩惱を断てない私達をなんとかするために、阿弥陀仏は浄土を構えた。お釈迦様は私達に煩惱を断ちなさいと、仏への道をお勧めになりました。その後、仏教では如何にして煩惱を断つのかということに腐心してきました。八百年前、法然上人は「煩惱は断てません」と言いました。この世に生きている限りは煩惱を断てない私たち、こう言い切ったのが法然上人でした。そしてそれを継いだ

のが親鸞聖人でした。

ですから、「よきこともあしきことも、業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはさふらへ。」よいことも悪いことも業の結果に任せて、ひとへに本願をたのめばということです。

今は如何にこの世を幸せに生きるか、幸か不幸かに皆さまが拘つてらっしゃる時代です。当然それは人間として当たり前の姿です。でも、それに拘るから、ときに苦しくなり、絶望してしまうのも人間です。失望するけど、また希望を持っていたく。人生は期待と失望の繰り返しだと思います。でも失望を通り越して絶望してしまうことがある。執着が強ければ強いほど、それが敗れたときに絶望します。もう出口がない、意味がないということになります。でも人は皆そうして生きてきたと思います。この世には絶望しかなかった時代に、法然上人はあなたでも仏になれると希望を与えました。それが八百年前の他力本願の教えだと思っています。いつも言っておりますが、希望の希は澤穂希選手の「まれ」ですから、まれに叶う望みのことです。もともとは、まれに叶ったらいなと思つて生きる。これが元々の意味で希望という言葉に託された思いだったと私は思います。そうなったらいなと信じて生きる。本当に浄土に往生して仏になるかどうかわからないけれど、こんな私でも浄土に行つて仏になれるのだという希望、まれに叶う望みを見いだして生きる。それを八百年前の日本人は「南無阿弥陀仏」に込めていたかと思っています。

戦争をする国になるのかと絶望したくなる現代日本だと思えますけれども、でも、人の中にはどっかに共通の願いがある。平和な世界を作りたい、これが悲願だと思っています。悲願ですから、金メダルみたいに簡単に貰えるものじゃありません。本当の悲願はずっとず

つと達成できないことです。なかなか達成できないことだけれども、ずっと願ひ続けている。私の一生で足りなかったら後に託す。願ひを継続していくために、「南無阿弥陀仏」の言葉と他力本願の信心を伝えてゆくのだと思います。こんな私でも成仏できる。成仏する目的は、私が成仏して完結する訳ではありません。みんなを成仏させるために私がまず成仏する、というのが仏教です。一切衆生の成仏を願つて生きる。まずは私が浄土に往生して仏になる。仏になって終わりではありません。私も阿弥陀仏になる。阿弥陀仏のように皆を成仏させようと生き続ける。これが浄土に行つて仏になるということだと思います。今までの日本では死んだら先祖になるということでした。家の守り神になる。それが皆様の先祖教的来世でした。私の大事な家族、子孫を見守つていく。それが日本人の来世でした。そういう守り神になるのもいいですが、これからは仏になるのはどうですか。私は阿弥陀仏になりたいんです。すべての衆生の成仏を願つて、願ひの塊になりたいです。悲願の塊になりたいです。というのが、私が三十数年に亘つて南無阿弥陀仏を相続してきて導き出してきた悲願、「南無阿弥陀仏」を唱える意味かと思つております。

人にはそれぞれの願ひがあつて、夢があります、実現したいことがあります、それが生きていく拠り所になっていきます。でも、その自己実現の物語だけだと、ときに絶望に繋がります。それぞれの願ひの奥底に、みんなで成仏したいという思いを共有しませんか。みんなで悟りたい、真理の世界がどこかにあると信じたい。信じて生きる。私ができなかったことは私の縁者が継いでゆく。願ひが重なつて生きてゆくというのが、私は御縁があつて生きるということだと思います。

法然院に代々御縁のあつた方々の心が、今の法然院には重なつていっていると思つていますし、

私の中にも重なっていると信じながら、お念仏を唱えさせていただいております。まずは人同士がなかなか対話しにくくなった世の中において、お寺は対話の場を作っていく。いろんなことに興味を持った方、願いを持った方、それがお寺という場で集って、いろいろ願いは違ったように見えているけれども共通の願いがあつたなと探っていく場になるのが寺の役割の一つかなと思っております。これが私としては仏教徒として生きることだと思っております。

法然上人の仏教は、ご承知のようにお弟子さんの解釈によって、いわゆる浄土宗、浄土真宗、時宗などに分かれました。同じ他力本願念仏ですけれども、それぞれのお弟子さんたちの個性によって、解釈によって、いわゆる浄土宗、浄土真宗、時宗、浄土宗西山派などに分かれました。知恩院を総本山とする浄土宗は、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、私が一生お願いしておくと、臨終のときに浄土から阿弥陀仏が迎えにこられて、浄土に往生すると説いています。極楽往生をお願いしておくのが「南無阿弥陀仏」を唱える意味だということです。浄土真宗は、私が唱えているんじゃないくて、阿弥陀仏が唱えさせている南無阿弥陀仏だ、唱えていることも他力だということを強調されます。念仏を唱えているということは既に阿弥陀仏に摂取されている状態ですから、これから往生をお願いするのが南無阿弥陀仏を唱える意味ではないと教えられています。「感謝します、有難うございます、阿弥陀様」という意味で唱える南無阿弥陀仏。報恩感謝の念仏。私が念仏を唱えておけば、死ぬときに阿弥陀仏に救われるのか、唱えている私自体は仏さまと一体となったということなのか。阿弥陀様が私の中で働いたということなのか。それが簡単に言うとうと浄土宗と浄土真宗の違いだと思います。そして、お願いも感謝もするなとおっしゃったのが一遍上人

の時宗でございます。念仏を唱えることに集中せよ、心を忘れて唱えよ。お願いの心も感謝の心も要りません、とにかく「南無阿弥陀仏」を唱えよというのが踊り念仏を勧められた一遍上人による念仏の意味づけで、これが時宗となりました。

如何に念仏を唱えるのか、どんな信心で唱えるのかという意味づけをすることによって法然上人の浄土宗は、歴史の流れの中で、いわゆる浄土宗、浄土真宗、時宗などに分かれてしまいました。法然上人に戻りますと、私は凡夫なのか聖者なのか、いまは末法なのか正法しょうぽうなのか、時代と私の器を問うた上で、私は末法の世を生きる凡夫だと信じ、「私は自力では自分をコントロールできない愚か者だ、だから念仏を唱えて浄土に往生すると信じて生きるしかない。私たちはお互いに愚か者同士ですよ」という人間観に基づいて、とにかく念仏を唱えて生きよと法然上人はお教えになりました。

今の浄土宗は法然上人の浄土宗ではありません。いまの浄土宗は法然上人の教えから外れてきた教団ですね。何故かという、浄土宗では元々「南無阿弥陀仏」さえ唱えればよかったのですが、法然院に本尊阿弥陀如来の他に地藏菩薩、弁才天、文殊菩薩も安置されているのが好例です。最初に申し上げたように日本人の願いが極楽往生から現世利益に変化したので、「南無阿弥陀仏」だけを唱えていても足りない、この世の幸せも祈りたいという皆様方のご要望に応じて、いわゆる浄土宗教団は阿弥陀仏以外の仏様も拜むという選択をしてきた歴史があります。つまり今の浄土宗は法然の教えから外れてきた教団です。この世の幸せも一方で祈る。これでは「よきこともあしきことも、業報にさしまかせて生きる」ことはまったく違ってきます。他力本願とはまったく違う生き方ですね。他力本願の信に生きるとは、とにかく「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…」と唱えて、どんなこと

が起こつても「これが私がこの世で出逢うべき御縁なのだ」と受け止めて生きよ。」ということ。そんなことはなかなかできないけれども、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…」と唱えてゆくと、私の身に生じることは、この世を生きてゆく上での因縁だ、都合のよいときだけ因縁と言つて悪いときは運が悪かったと受け止めるのではなく、すべては因縁だと捉え、この世は娑婆といわれるように忍耐すべきところであり、この世は生まれてきた以上必ず死ぬところなのだ、このように信じて生きれば、どんな自身の状態、どんな世界の状況と出合つても少し心にゆとりができてきます。こんな私でも仏になれるという大きな物語を持ち、やがて私はみんなを目覚めさせるのだという悲願を持って生きてゆくことが、ちつちやな物語に敗れ続けても抛り所を完全に失うというのではなく、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…」と唱えることを喜んでいただけたら、それこそ法然上人は喜んで下さると、私は思つてお寺を預らせていただいております。これも理想ですから中々そうもいかないのです。ともかく唱え続けるしかありません。法然上人は唱えてみよとおっしゃっただけなのです。唱えてみればそうなるよとおっしゃっているのです。法然上人が教えられた阿弥陀仏の本願を信じてゆくかどうか、そんな教えは要りませんというのも各々のご選択ですから、私が申し上げられるのは、法然上人は一切衆生を成仏させるという阿弥陀仏の本願を信じ、ただ「南無阿弥陀仏」を唱えることを勧められたということ、私はそれを信じて「南無阿弥陀仏」を唱えつつ法然院を三十年余りお預かりしてきた結果、私の中に眠っていた阿弥陀仏と同じ悲願が「南無阿弥陀仏」の声とともに少しだけ呼び覚まされてきたことを実感しているということです。

それぞれの執着に生きているのが人間であり、お互いアホ同士であり、愚か者同士であ

り、人間は己が絶対正しいと言いたい生きものなのであり、その世界の中で一緒に生きていくしかない、段々自分の中に抛り所が定まってゆきます。人を差別しない。私は賢くて、あんたはアホやと思わない。仏さんから見れば、執着に生きている愚か者同士や、というのが、私は他力本願念仏を喜んで生きていくことで自分の中に定まっていく信心、つまり親鸞聖人が言われる「まことの心」、それに基づく実践。私は事件を知った際には被害者のためにも勿論悲しみますが、加害者のためにも悲しみます。いろんな事件が起こり続けていますが、どうして彼は加害者にならざるを得なかったのか。何故この世に絶望してしまったのか、ということにも心を重ねてゆきます。加害者に対して一緒に目覚めていく仲間同士だと段々思えてゆけます。それは阿弥陀仏がそう願って下さっているということ、が、長年、南無阿弥陀仏を唱えてゆくと、次第に自分の願いと重なってゆくということではないかと私の中ではそのように思っています。色んなことがあつてすぐには解決できません。そうやってきたのには、この日本社会の数十年間の歩みがありますし、いや八百年前から、いや、お釈迦さまが出られてからもずっと、人間はそうやって、ああでもない、こうでもないと言って、己に拘って生き続けてきたんだということを確認しつつ、でも私の中には共に目覚めたい仲間同士やという悲願がどこかにある。あなたの中にもあるんじゃないでしょうかということ、を、根気よく申し上げ続けていくし、示していくことしか、私に出来ることはないのではないかと思つて、これからも私なりにお寺を預らせていただければと願っております。

資料には今までやってきたこととか、法然上人がどうおっしゃったかということをもとめております。毎月十一日は東日本大震災の物故衆生追悼法要を続けております。四月一

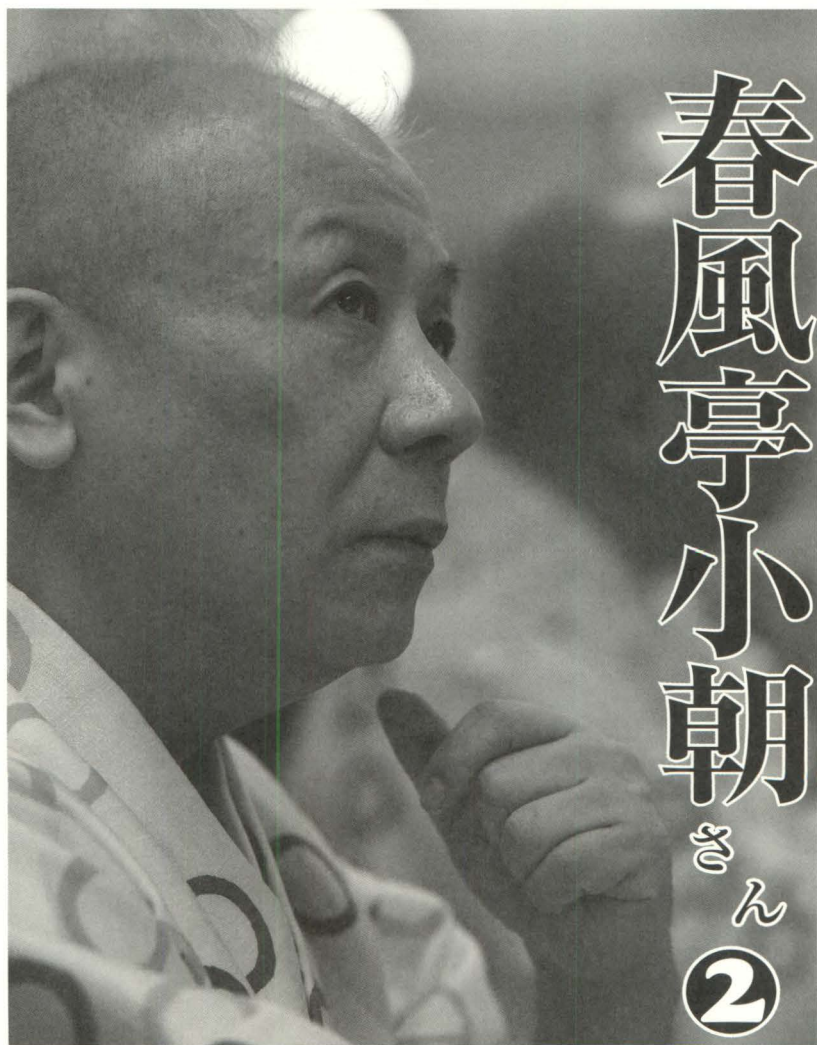
日からは伽藍内春の一般公開がございますが公開中も随時法話をいたしております。去年も、年間百五十〜六十回、寺で法話をさせていただきました。だいたい、この数年は百五十から二百回平均、観光客相手に寺で法話をさせていただいています。去年一番面白かった質問は「法然院は神社ですか」というものでした（笑）。でも私は驚きませんでした。これは神社と寺の違いを誰も教えてこなかった。どこが違っているんですか。親も教えないし、先生も教えないし。誰が法然院は寺だと教えてきたのか、というのが今の日本だと思えます。二十代の男性でしたけれども、有難いご質問でした。ここから私達坊主は、もう一回再出発しなければなりません。お寺はどういう意味があり、神社にはどういう意味があったのか。神社も何か願い事を叶える場所になっておりますけれども、私が思う神社の存在意義とは、畏敬の念と感謝の念を伝えていただくこと、万物に対する畏れ敬いの気持ちと日頃は鎮ま^つって下さっているのを感謝する想いを伝え続けていただく場それが神社であると思います。日頃は穏やかな山が時に御嶽山のように荒ぶります。どうして御嶽山に神社があるかというところからです。怖いのが大自然だ、昔の人は時々怖いから鎮める、でも日頃は水の恵みをいただき、暮らしを護^{まも}って下さることを喜ぶ。そのための神社であると思います。そして、儘^{まま}ならないのが人生だということを伝えつつ「それでも人間には共通の願いがどこかにあると信じ、仲間同士だという気持ち^{きもち}を培い、今は何か訳の分からないことをなさっているけれども何か理由があるはずだと寄り添い、諍^{しやう}いの絶えない世界を直ぐには変えられないけれども穏やかな方向に変えていきたい」という願いを伝え、慈悲の実践に精進する場であると思っております。

ご静聴いただき、有難うございました。

（了）

連載

会いたい人 関 容子



春風亭小朝
さん

②

撮影／タカオカ邦彦

小朝さんは直接の師匠、柳朝だけではなく、多くの大師匠、先輩方から教えを受け、引き立てられた。

入門の際、師匠の家に道案内してくれた兄弟子の一朝が、前座修行の中でも大切な太鼓の打ち方をていねいに指導してくれたのも、小朝少年が才能をキラキラさせながら、素直で可愛らしかったからだろう。のちに（平成九年）、日本武道館で一万人を集めた「春風亭小朝の大独演会 IN 武道館」のときに、「一朝兄^{あに}さんが観に来てくれたことが一番嬉しかった」と語っているの面白い話だ。

「前座のころ、末廣亭で太鼓を叩いてましたら小さん師匠が、誰の弟子だい？ うまいなあ……つておっしゃってくれて。それから笛も習って吹いてましたら、あいつは笛も吹くんだ……つて、あんまり前座の名前なんか憶えない師匠が、早く名前を憶えてくれましたから」

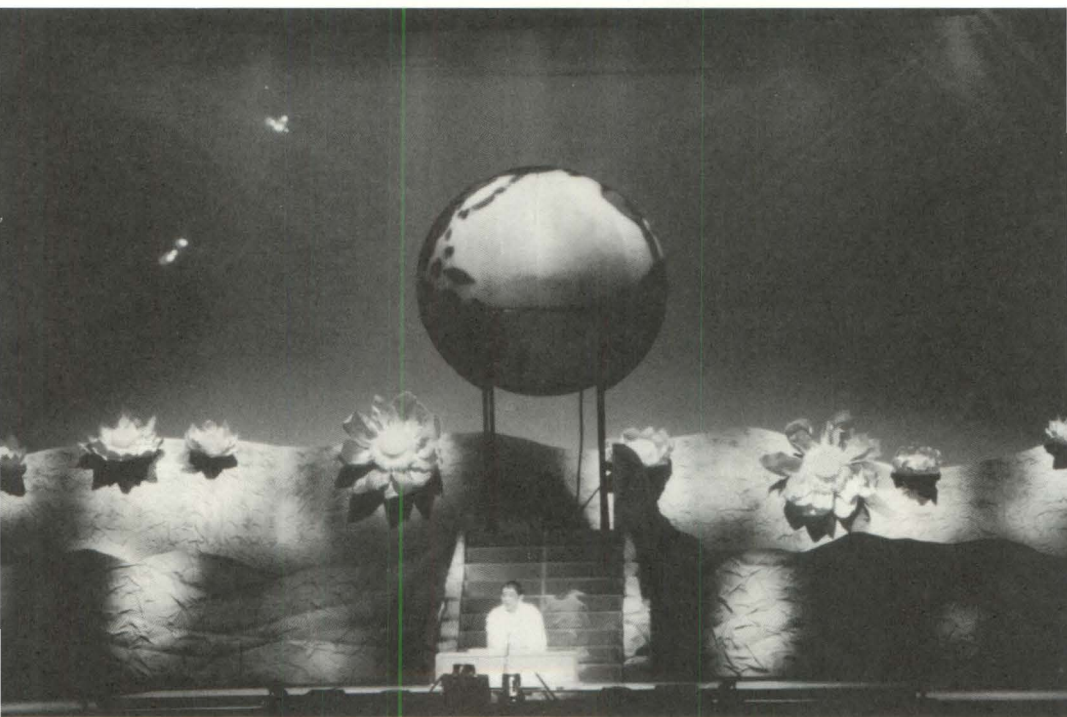
小朝さんは最近の会でも篠笛を披露するな

ど、相変らずの多才ぶりを発揮している。

なお、昭和五十五年、小朝真打昇進披露口上には、師匠の柳朝はもちろん、小さん、志ん朝が花やかに居並んだ。抜かれた三十六人の中に、一朝兄さんや現在活躍中の錚々たる噺家も多く含まれている。

「僕が二ツ目になったころ、小さん師匠はもう誰にも稽古をつけなくなっていたんですけど、師匠は剣術がお好きですから、刀を振り回す噺ならもしかして……と考えて『首提灯』をお願いします、つて頼んだんです。あれは侍が無礼者の首を一刀のもとにはねる噺ですからね。そうしたら案の錠、引き受けてくださった。『上げ』と言つて、師匠の前で僕がしゃべるときに、途中で師匠が木刀を持ってきてブンブン振り回して、それが十分くらいも（笑）。つくづく剣道がお好きなんだな、と思いました」

小朝さんは、ちょっと訊き難いこともまっすぐにスパリと質問し、いやがられないのも



平成九年十月十一日の「春風亭小朝の大独演会 IN 武道館」。

人徳だろう。

「小さん師匠に、師匠はやきもちをやかないんですか、って訊いたら、あんまりないけど、志ん生さんはなんであんなにらくにやって受けるのかなあ、いいなあ、と思ったことはあるよ、って。

これから僕はどうしたらいいでしょう、って訊いたら、考えた通りやっていけ、ただし間違えたな、と思ったらすぐ引き返すんだ、恥ずかしい、みつともない、と思うな、って。僕はそれを今も座右の銘にしています」

志ん朝との間にも同じようなエピソードがある。

「志ん朝師匠を初めて見たのは中学生のころ、浅草演芸場です。なす紺の着物でスーッと現れた途端、ウワァー、なんてきれいな嘶家さん、と思いました。『風呂敷』がドツカンドツカン受けて、スツと引っこんだとき、花のある素敵な人、という余韻が残りました。前座のころ、志ん朝師匠のお宅の二階で

『岸柳島』を稽古していただいたんですが、あの志ん朝師匠と一メートルくらいしか離れてない差し向いで嘶が聞けるなんて、なんと贅沢なことか……と、感動しました。

その師匠にも、僕は思ったことを訊いちゃうわけですよ、後日ですけどね。それは師匠がめざましい上昇期を過ぎて、平らに見えた時期が僕にはあつて、それで、師匠はわざと足踏みしていらつしやるんですか？　って訊いた。全然悪気はないんですけどね。師匠が唸っちゃって、ウーン、俺、足踏みしてるように見える？　って言われて、あつ、と思っただんですけど、年齢的なものとか、何か計画があつてのことかと思っただんですけどね」

志ん朝としては、才能も感性も認めている後輩の目にそう映ったことはショククだったろうが、いい刺激だったとも言える。

「志ん朝師匠は物ごとをよくわかっただけで、うちの師匠があるとき、小朝は落語以外のことをやりたがって困る、ってばやいたら、

いいんですよ兄さん、ほかのことやってても必ず落語に戻ってきますよ、俺も似たところがあるから大丈夫ですよ、つてうちの師匠をなだめてくだすったりね。

志ん朝師匠は『鬼平犯科帖』の木村忠吾にずっと出てらして、僕はテレビ朝日の『三匹が斬る』の燕陣内役で十年間出てましたから。お互いに俳優志向があつたのも、わかってたすつてたしね」

柳朝師匠はぼやきながらもめざましい快進撃を見せる愛弟子が自慢でならなかつたのだろう。そのころ、柳朝は小朝の付き人か、と言われたとか。

「そんなことはありませんよ（笑）。でも、こんなことがありました。ラジオの深夜番組、生放送やつてる最中に、プロデューサーが向うを指さすんです。見るとガラスの向うにうちの師匠が来てるんですよ。終るまでずっと待ってて、赤坂とかに飲みに連れてつてくれ

るんです。そんな師匠も珍しいと思うけど、伴に接するように接してもらつて、よかったです」

若いころから既に自分のスタイルを完成させていた小朝さんに、柳朝はどんな稽古をしたのだろう。

「してくれませんでした。俺の嘶は荒っぽいところがあるから、まずは明るくていいねいな師匠のそこへ行くように、ある程度になったら俺がやってやるから、と言つて、こんな話をしてくれました。昔、師匠が志ん生師匠に稽古してもらったときに、師匠が『隠居さん、こんちは』つて、ガラッと戸をあけるところで、ダメだよそれじゃあ、つて言われて。でも師匠だつてこうやつてたじゃないですか、つて言つと、志ん生師匠が、俺ならあくけどお前じゃあかないんだよ、つて。これは簡単なことだけど、ものすごく重い言葉ですね。初めのうちはキチンとあけなきゃいけない。稽書からやらないといけない。それからだん

だん崩して行く。芸の格とか値打ちとか、そういうことですよ。うちの師匠もそれが印象にすごく残ってたんで、僕に話してくれたんでしょね」

それにしても、まず「明るくていいねいな師匠」に教われ、というのはいかに適切な指示だったと思う。明るいことは花があるということだし、ていねいで小気味よく運ぶ癖はお客様の気を晴らす。つまりは、売れることにながるのだろう。

「師匠は、グチを言わない人のところへ行け、とも言いましたね。酒飲んでグチグチ言つてするような老人は好きじゃない。前に何かいやな思いをしたことがあるんじゃないですかね、多分。」

うちの師匠は、僕にとつては幸いなことに、晩年になる前に脑梗塞で倒れたんで、いやなところを見せてないんですよ。倒れる直前に、師匠の家から百歩くらいの場所にマンションを借りたんですね。それは、育てた弟子も真

打になったことだし、ここらで自分も足許をしつかり見つめなきゃいけないというんで、稽古場として借りたんですよ。稽古してるところをあまり人に見せない方なんで、そこを借りて、でもおかみさんはてつきり女かと思つたらしいんだけど、そんな近くに囲うわけないじゃないですか（笑）。そしたらしばらくして倒れて、寝たきりが長かったんですけど、陽気な病人ですからね。筆談や手振りで冗談を言ったりしました」

ところで、小朝さんの『こわさ知らず』によれば、噺家の葬式というのはひどく陽気なものだそうで、喪主が現れたときだけ神妙な顔を作つて悔みを言い、いなくなればすぐバ力騒ぎが始まる。柳朝も人後に落ちず陽気に騒ぐタイプだが、小朝さんは師匠が高座で流した涙を見て、感動したことがあるという。「小さん師匠のおかみさんが亡くなったときです。あの方は噺家のおかみさんの鏡とも言われた人で、みんな何かしらお世話になつて



写真中央の小朝さんの真打昇進披露口上。左から、林家彦六師匠、立川談志師匠、小朝さん、林家三平師匠、柳朝師匠。昭和五十五年五月、鈴木演芸場。

ましたから、落語界全体がショックでした。

上野の鈴本の楽屋のテレビに出棺の様子が映し出されて、次々にコメントする知った顔を見ては、みんなが口々に茶々を入れる。芸人の悪いクセです。その中で一番騒いでたのが、わが師匠。やがて出番が来て、僕が袖で見ていると、得意ネタの『浮世床』で大受けに受けてました。でも十分くらいして、師匠が突然下を向いて黙りこんじゃったんです。しばらくして顔を上げたとき、横から見てる僕にも師匠の涙がはっきり見えました。すみません、実は今、小さん師匠のおかみさんの葬式を楽屋のテレビで見えてまして、変な気持

ちになりました……って詫びてるんです。

つまり師匠は楽屋で騒いで自分の氣を引き立てていたんだけど、とうとうこらえ切れなくなっただけですね。しかしすぐに氣を取り直すと、滅多に見せない余興を一つ披露して高座をおりてきました。楽屋の連中は何も気づいてません。僕はそのときもう二ツ目になってましたから、そんなことしなくてもいいのに、師匠の着物を一生懸命たたみながら、こういう人間になりたい、と思いました。それでこの日はどうしても僕が師匠の着物をたたみたかったんです」

柳朝は平成三年二月に亡くなった。六十一歳だった。

「そのころ僕が住んでた家の二階に、僕は寝てまして、夜はインターフォンを切つとくものからです。急用があるとうちの弟子が裏へ回って庭から小石を窓にぶつけるんです。コツコツ、なあに？ って窓をあけたら、師匠

が亡くなりました、って。実は前からこの場面をずっと想定していたんです。師匠の死はそうやって知るな、と思つてたら、その通りになった。師匠が徐々に悪くなつて僕らは覚悟してたわけじゃないですよ、急変してすぐ亡くなっただけですからね。朝、コツコツと音がしたとき、あ、亡くなった、思いました。不思議なことに、葬儀に僕が出てほしそうな方は、僕が東京にいるときに亡くなる、というのがあつて、昔からそうなんです。

うちの師匠のときも『三匹が斬る』の撮影中で京都へ行きっぱなしでしたけど、たまたま撮影が早く終つて、独演会の前の晩に帰れたんです。そしたら翌る朝ですからね。おかげで僕を育ててくれた大事な師匠の葬儀を取り仕切ることができました。有難かつたと思つてます」

(この項つづく)

念仏の第一の助業、米に過ぎたるはなし。衣食住の三は念仏の助業なり。能々たしなむべし。

(法然上人『十二問答』)

お念仏の生活を助けるものとして「お米」以上のものではありません。衣・食・住の三は、どれもお念仏を称えるこの身を支えてくれるものです。このことを、よくよく心しなくてはなりません。

「食」を観よ

毎年夏が近づくと、そろそろお施餓鬼の季節だなど、軽い緊張に似たものを覚える。もっとも、施餓鬼会は一年のうち、いつ、あるいは何度勤めてもいいものだし、東京圏の多くのお寺はだいたい前から、暑さを避け五月から六月にかけて行っている。筆者の寺は七月二日。まだ本格的な暑さを迎える前ではあるが、薫風爽やかな五月に勤めているお寺さんがうらやましくない、といえは嘘になる。

過日、その施餓鬼会の檀信徒への案内状を作らねばという時期に、ある書物で、現代語で意訳された「五観」と呼ばれる偈文を目にした。これは中国唐代の道宣（596—667）という僧によりしたためられた、食に対する心得を説いたもので、本山などでの修行中、毎食事の前に唱えられる。

まず感じたのが、懐かしさだった。「お経に対して懐かしさ？」と、読者はいささか奇異に思われるかもしれない。言い訳をさせてもらえるなら、実はこの偈文、さきに記したように修行中に唱えるもので、ふだんの朝夕の「おつとめ」や年回法要、あるいは施餓鬼会などで唱えることはない。筆者が直近で唱えたのは、「聖書道場」と呼ばれる行を京都・知恩院で受けたときだから、目にしたのは実に七年ぶりということになる。

【五観】

一つ。目の前の食事が、いかに多くの労力と手間によって出来たものか、どこから供されたものか、そのことに思いを致せ。

二つ。果たして自分にその食事を受けるだけの徳がそなわっているかどうかを省みよ。

三つ。味について云々するのは煩惱の顚れであるから、執着してはならない。

四つ。食事は己の身を養い、命を保つための良薬としていただくものであると心得よ。

五つ。食事は、ただひたすらに仏道を成就するためにいただくのであって、世俗の榮達などとは無縁であると心得よ。

修行中、毎日毎食、「一つには功の多少を計り、彼の来処を量る」といった具合に、書き下し文で何十遍と唱える。これまでに受けてきた修行の分を累計すれば、それこそ相当の回数を重ねている。当然頭にたたきこまれ、この偈文が持つテンポのよさも手伝い、一句違わずスラスラ唱えられるようになった。

意味もだいたい把握していたつもりでいた。

が今回、この偈文のわかりやすい意識を読んで、日々の食に対する向き合い方がいかに不遜であったかを思い知らされた。その一文字一文字から、お前は本当にわかっているのかと、鋒を突きつけられたようだった。主体的に「唱えていた」のではなく、「口から出ていた」だけかもしれない。

「餓鬼とは、生前に貪りや物惜しみが強かったもの、そしてそのものが死後に堕ち行くのが餓鬼界」。經典にはそう説かれている。その餓鬼を救うために釈尊の教説にもとづいて修する施餓鬼会、その導師を務める自分は餓鬼界とは無縁、などと言いきれるだろうか。

思えば現代のわれわれ、「食」に対する愉しきや味の追求には妥協しない一方で、食の原点とも言うべき「命をつなぐもの」という第一義をどこかに追いやっていることは否めない。「食」は仏教的にはさらに、「仏道を歩んでいくための」という重要な意義が付加される。「五観」はまさに、仏の教えを支えに生きるわれわれに、「五つの視点から食を観よ」と促しているのだった。「食」のみではない、それはそのまま「衣」と「住」に置き換え得る。

なんのための衣・食・住か——。肝に銘ぜねば。

（小村 正孝）

東日本

大震災被災地を訪れて の 4

成田淳教

東京世田谷感心寺住職
関東ブロック浄土宗青年会理事長



福島教区浜通り組青年会員による浜〇カフェを楽しむ被災者の方々。

五月は各団体の会議やお施餓鬼なども多く、残念ながら東北に伺う事ができませんでしたので、今号ではこれまでも何度かお伝えしてきている「浜○かふえ」^{はままる}について少し詳しく書かせて頂きます。

私が浜○カフェに参加させていただいたのは震災の翌年からです。震災が起きた平成二十三年は、被災地のいくつもの寺院の境内や墓地の瓦礫処理や片付けに奔走し、年末頃それらがひと段落した頃で、それまでボランティア等の経験が無かった私は今後、どのような活動ができるのかを考えていた時でした。そんな時、東京教区青年会の仲間が浜○かふえに参加するという話を聞き、同行させてもらったのが最初です。

浜○かふえは平成二十三年九月からはじまったそうです。当初は瓦礫撤去などのボランティアをしていた福島教区浜通り組青年会の皆さんが、被災された方々の復興への長い道のりに悲嘆する姿を見て、今後どのような活

動ができるのかと模索していたそうです。

その頃、いわき市のボランティアセンターでは「見回り隊」というものが行われており、各仮設住宅を回って被災者への傾聴とカフェの活動を行っていたり、曹洞宗の僧侶が「行茶」という同様の活動を行っていました。それらを参考に青年会で新たに始めたのが「浜○かふえ」でした。仮設住宅に日を決めて訪問。コーヒーなどの飲み物とお菓子、子供たちのためにポップコーンなどを準備して、被災者の方と一緒にお茶を飲むといった活動です。もちろん当初から今までずっと無料で提供しています。

最初は、失敗や苦勞の連続だったそうです。特に気を付けなければならないのは会話の中で「家族」についての話しかけ方だったそうです。これは、私も浜○かふえに伺った時、最初に特に大事なことで教えていただきましたが、日常の会話のように感じる「お父さんは何をしているの？」といった問いかけ

をしてはいけない、ということでした。震災でお父さんが亡くなってしまっていたりする場合も多く、家族の話は非常に注意が必要で、その場にはない家族についての問いかけは、家族構成など正確に知っていなければ、してはいけないのです。

そうした試行錯誤を繰り返しながら、週に一回、全部で六〜七か所の仮設住宅を順番に回って浜〇かふえは現在まで続いています。四年半にも及んでいるのです。

こうした長期にわたる活動ですから、モチベーションをどう保つかというのは大変です。当初から参加し続けている青年会員は、被災当初の凄惨な様子を思い出すこと、お寺の地元での出来事である、という事を再認識する事で意欲を保っているそうです。

もちろん、それぞれの寺院で法要や行事などがありますから、毎週開催するにあたつてのスケジュールのやりくりも苦勞の一つです。

また、浜〇かふえの運営の基本は、仮設住

宅にいらつしやる方々が主役であるという事で、引きこもりの防止や、コミュニケーションの形成、被災者同士の会話による情報交換などの場で、その果たしてきた役割はとても大きなものです。同じ地区で被災し同じ仮設住宅に入居した方でも、浜〇かふえで再会したという事もあったそうです。

現在は仮設住宅で生活していた方が災害公営住宅に移られたりして仮設住宅住まいの方も減ってきていますが、浜〇かふえを楽しみにしてくれている方がいる限りは続けていく、というのが、福島教区浜通り組青年会の方針だそうです。

長年楽しみにしていた方も多く、災害公営住宅に移られた方が、移り住んでいる災害公営住宅で、「浜〇かふえをやつてほしい」という要望があり、それに応えるという新展開もあるそうです。

また、地元のお寺の青年僧が活動主体ということで、社会福祉協議会からは、一部の助

成金目的のNPOよりも頼みやすいという評判もあるそうです。地元の僧侶たちによる継続的な活動が、被災者の方々の安らげる場として定着しているということです。

福島以外の被災地でも現在でも浜〇かふえに参加した体験と手法を参考にしていくなかの団体や個人の集まりが、いろいろな傾聴活動やカフェ活動をしています。浜〇かふえは大きな役割を担ってきたということです。

また、一昨年から、浜〇かふえの活動の中から特に子供たちを対象とした「ふくしまっ子smileプロジェクト」も生まれています。原発事故の放射能の影響によりストレスや不安を抱えての生活を強いられている福島の子供たちに、一時でもそのことを忘れて、外で遊び、健やかに成長してほしいという願いに

よるもので、子供たちを絵本山知恩院のおてつきこども奉仕団へ連れていったり、キャンプやスキーをしたりという活動です。こちらは協賛金も募っていますので、ご協力いただければ幸いに存じます。詳細はホームページをご覧ください。

<http://fukusumaiinai.net/>

最後になりましたが、今回は浜〇かふえを主催している浄土宗福島教区浜通り組青年会会長（兼福島教区浄土宗青年会会長）の馬目一浩上人に改めてお話を伺い纏めさせていただきました。誌面からですが、心より御礼を申し上げます。

なりた じゅんきょう 東京教区玉川組 感応寺住職

昭和50年1月、世田谷大吉寺に生れる。平成13年より感応寺住職

平成22年浄土宗東京教区青年会会長。平成24年東京浄土災害対策委員

平成26年関東ブロック浄土宗青年会理事長（現職）



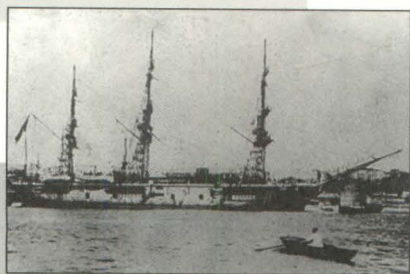
トルコと日本

森清鑑

第二回

友好の絆

2



遭難救助

轟音とともに砕け散った船体。荒れ狂う漆黒の波。投げ出された船員達は、のみ込まれ、岩礁にたたきつけられる。転句、辺り一面、何もかももない、いつもの暴風の夜の光景。ところが、全身傷だらけになりながらも、岩礁にへばりついている者がいた。一度は波間に消えたが次の大波で岩礁に乗り上げた者もいる。ある者は氣を失ったが、氣がつくと岩にへばりついていた。

この船員は、天空に灯りを見る。灯台だ。あそこに行けば、助かるかも知れない。彼は岩から岩へ、幾度も海水を飲みながらも、必死に泳ぎ、岸壁の麓を掴む。それから闇の中を手探りで、たたきつける風に耐えながら四十メートル登る。ようやく岸壁の上に立つ灯台に辿り着いた。

宿直灯台守の乃美は、暴風雨の音に混じり、「どすん」という、轟音を耳にしている。船

が水蒸気爆発で砕け散った時の音である。しかし、彼はその実態が何であったか、知る由もない。それからしばらくすると、灯台の戸を叩く音が聞こえる。何か叫んでいる。戸を開けると、そこに血だらけの、裸の大男がうずくまっている。日本人ではない。ともかく肩を貸し、中に引き入れる。男は大声で海の方を指さし、必死で何か言っているが何を話しているのか皆目分らない。

だが海難事故だと直感する。彼は灯台に隣接する官舎にいる主任の滝澤に知らせる。跳んできた滝澤は、男に万国信号旗を見せる。男はトルコを指さす。さあそれから二人は懸命に応急手当を開始。血をぬぐい、ラードを傷口にぬり、包帯を巻



く。そして滝澤は、小使いを榎野の斉藤区長宅に走らせる。ことは重大なり。予想通り、同じように全裸に近い、血だらけのトルコ人が九人もやってくる。

そこは紀伊大島であった。民謡に歌われる「ここは串本、向かいは大島、仲を取り持つ巡航船」の大島である。紀伊南端串本町。海沿いに熊野街道が走る。嘗ての熊野古道大辺路。沖合に杭を突き立てたように並ぶ、天然記念物「橋杭岩」。その後方に浮かぶ大島。

この大島の東端に立つ榎野崎灯台。その崖下が、トルコ軍艦の遭難場所であった。当時、大島の集落は、この榎野、そして南の須江、串本側の大島地区の三つしかなく、人口は、全部合わせても二千人強にすぎない。とりわけ灯台のある榎野地区の人口は一番少なく、僅か二百人程度。

村の者が駆けつける

知らせを受けた榎野の斉藤区長は、ただち

に部落民に知らせ、こぞって灯台に駆けつけた。そのうち何人かは嵐に混じる軍艦の爆発音を聞いたという。事の重大さが分かるにつれ、区長は大島、須江にも連絡。彼等も早速駆けつける。ともかく救助だ。

岩礁と崖の間の狭い海岸に駆けつける。夜が白むにつれ、惨劇の実態が明らかになってきた。まるで地獄の有様。狭

い浜には無数の船の残骸と、混じって百人を越す人々が打ち上げられている。榎野地区の村民は丸となって、彼等を引き上げる。身体を揺さぶり、大声をかける。唇に身を寄せ、呼吸を確かめる。だがほとんどの人が最早、冷たくなっていた。トルコ兵士達の衣服は剥ぎ取られ、傷だらけ。それでも村民は、少しでも身体の内くもりを感じ、僅かな息を確認



すると、衣服を脱ぎ去り、抱きしめたのである。異国人もなにもない。遠くから来ただろうに、ここで死なせてなるものか。この保温効果で数名の者が息を吹き返す。動けるものには手を貸し、重傷者は、蓮台に乗せ、次々と崖の急坂を灯台へと運ぶ。

かくて数十人のトルコ乗組員は、灯台に引き上げられ、応急手当を受ける。当然、灯台では収容しきれず、隣の狭い官舎も一杯。

大島の各地区から六名の医師が駆けつけ、本格的な治療が始まる。皆、夢中である。灯台と官舎では、収容しきれないので、比較的元気なものから、近くの大乗寺に運ぶ。医師達は結局、無給で奉仕することになる。

こうした村民の、身を投げ出した救助と、医師と灯台守の懸命な治療の結果、実に六十九名の生存者を得たのである。結果的には、少しでも息のあった者も、その後、回復し、全員、本国へと送り返すことができた。だが、この海難事故で、五百八十七人もトルコ兵

士が犠牲になった。

遺体と遺留品捜査

村民達は、翌日から連日、まだ荒れる海に潜り、遺体探しに全力を尽くす。後日、遠く離れた地にも遺体流れ着いたこともあった。しばらくして、提督オスマン・パシャの遺体も上がった。船の残骸やバックル、短剣、衣服などの残留物も可能な限り、探し出され、船の残骸は、板切れ一つに至るまで集められ、保管された。特質に値することは、この作業がその後の数年も続くのである。

大島村村長の素早い処置と連絡により、明治天皇はつい先日、晩餐会などで歓待したエルトゥールル号乗組員、国王への親書を託した、提督オスマン・パシャの災禍を知



り、涙した。天皇は直ぐさま、赤十字の医師や看護婦を派遣。万全の処置を執った。

食と衣服を

重傷の者もどうか命を取り留めることに成功したのは良いが、問題は回復のための食料であった。寒村である。しかも、この年は不作で農作物の収穫も少ない。加えて、海のしけが多く、漁獲量も極端に少ない。えらいことに村民は自分達の僅かに蓄えた食料を、惜しげもなく振る舞ったのである。中には、自分達の食を控えてまでも、彼等の命をつないだ人もいる。ついには、とっておきの鶏までつぶして食を振る舞うことになった。しかも、その調理はできるだけ、彼等が食べやすいように西洋風に工夫して提供したのである。トルコ兵士達は、それを知って涙した。皆、裸同然だったのだから、村民達は、自分達の衣服を与えた。そうした点も、四百年前に御宿で遭難したスペイン船乗組員の救助と

同じである。その真心と処し方は、日本文化伝統のなせるわざと云わざるを得ない。

別れ

こうして命をつないだトルコ兵士達は、治療も待遇も十分な神戸へと移送されることになった。この時、たまたま神戸にいたドイツ軍艦が助け手に出て、大島まで来て彼等に乗せて神戸に戻してくれたのである。トルコ兵士達と村民の別れはつらかった。双方とも全員涙でくもり、トルコ兵士の中には、泣きじやくつて艦橋でうずくまる者もいた。そうして互いの姿が見えなくなるまで、手を振り合ったのである。

墓地と慰霊碑

檜野崎では、トルコ兵士達の遺体を丁寧に葬った。発見した遺留品は、ことごとく持って行かせ、船の残骸も彼等の意向に従って、適切に処理した。遭難翌年の一八九一年(明

治二十四年)、村民達によって建てられた墓地に、「トルコ軍艦遭難の碑」が建てられた。この時には、高さ二メートルのささやかなものだったが村民達の心がこもっていた。一九二八年(昭和三年)には、大々的な追悼祭式典が行われ、翌昭和四年には弔魂碑が建立され、十年ごとに式典が開催されることになり、一九三七年(昭和十二年)には、今日見る大きな立派な慰霊碑が完成したのである。墓地や慰霊碑の掃除は、いつの日から檜野小学校(現串本町大島小学校)の子供達の仕事になり、第二次大戦中も、途切れることなく、現在も続けられている。檜野崎に行けば、今も幼い子供達でさえ、「エルトゥールル号」という一般の日本人には耳慣れない言葉を口にすることができる。村人達は、親から子へ、またその子へと遭難事件のことを伝えて、弔って来たのである。

【参考文献】

- 「明治の快男児トルコへ跳ぶ」 山田邦紀・坂本俊夫著 現代書館
「エルトゥールル号の遭難」 寮美千子著 小学館
「トルコ世界一の親和国」 森永義著 明成社
画像 ウィキペディアより・その他



小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第六十回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

いざ、博士号取得へ4



母トナからの遺言

渡辺海旭はロイマン教授の示唆で、博士論文に向け「普賢行願讃」の諸原典の比定作業に没入、心地よい秋風が吹くなかメドが見えてきたところへ、母親トナの訃報が故国からもたらされた。博士号を手土産に母に再会することを励みにしてきた海旭は、にわかに博士論文に手がつかなくなり、しばし母の思い出にひたった。

やがて海旭は母トナにまつわる回想からさめると、いま一度、妹からの訃報に記されていた「母の遺言」を読み返した。妹によると、母親は臨終の枕辺で息子・海旭にこう言い残したという。

——お前が今日あるのは、端山海定和尚のおかげです。あのとき海定和尚はお前を引き受けてくれた上に学校にまで行かせてくれた。何としてもお前は、立派な成果をあげて、その恩義に報いなければなりません。いいですか、

お前は徳川士族の子なのだから、恩義は何としても返さなければなりません。それができるまでは国へ帰ることなど母は許しません。

「徳川士族の子か……」と海旭はつぶやいた。父方は商人出身の「平民」だったが、母は徳川の陪臣・尾島氏の出で、それが終生母親の矜持の源泉であった。いかにも母親らしいと懐かしさを募らせながら、海旭は決意を新たにしていた。ここで博士号をあきらめては母にすまない、海定師にもすまない。なんとしても論文を仕上げよう。そして心のうちでつぶやいた。「徳川士族の子なのだから」。

「母の遺言」にはもうひとつ意味深長な言葉があった。

——帰国した萩原雲来からお前のことは聞かされました。お前はほんとうに良き友に恵まれて幸せです。今、雲来がお前の傍らにいてなくて母は大いに心配しています。雲来に代る良き友をお持ちなさい。それはきつと見つかるでしょう。その友の力を借りて、長年来

の志を何としても果たしなさい。いいですか、お前は徳川士族の子なのだから、恩義は何としても返さなければなりません。

「またしても徳川士族の子か……」と海旭は微笑を浮かべたが、年が明治四十年（一九〇七）に改まるや、その母の予言が見事にあたったので、海旭は大いに驚いた。ライン川を挟んで指呼の間にある町ケールに、気鋭の大乗仏教学者がやってきたのである。その男とはマックス・ヴァレザーといい、それまでは、ドイツ南西部のバーデン＝ヴュルテンベルク州は黒い森地方の南端に位置するパートゼッキンゲン^{シュヴァツバート}で研究生活を送っていた。たちまち二人は肝胆相照らす仲になり、「蒼い眼の雲来」を得た海旭の博士論文は一気に進むことになる。母親トナの引き合わせかもしれない。雲来に代る碧い眼の友、マックス・ヴァレザー

しかしながら、ヴァレザーに対する海旭の

第一印象は決してよくはなかった。いや、よくないどころか。若いくせに（後で知ったが海旭より二歳年下だった）なんとも傲岸不遜で鼻持ちならないやつだ、と強い反発すらおぼえた。初顔合わせは、ヴァレザーがロイマン教授の元へ表敬に訪れた折だった。帰りしなに、ロイマン教授が気をきかせて同席させていた海旭に一瞥をくれると、ヴァレザーが吐いたセリフがふるっていた。

「きみか、極東から来た研究者の見習いというのは。どの程度のものか値踏みをしてやるから、来週にでも僕の下宿にきたまえ。酒はたっぷりとふるまってるから」

無然とした海旭だったが、ロイマンのとりなしと酒につられて、次の週、ライン川を渡りバーデン大公国にあるヴァレザーの「下宿先」を訪ねあてて驚いた。なんと「花の屋」という名の小洒落たホテルの一室を借りきっていたのだ。海旭が住むレンガ造りの堅牢だが薄汚れたアパートとは大違いだ。

さらに驚かされたのは、部屋に招き入れられるなり、互いの自己紹介をはしょっていきなりこう言われたことだった。

「君のところの学者先生連中には、実につかりだ。何か学べると思ったのに」海旭は返す言葉を失って黙っていると、彼は顎に蓄えた豊かな鬚をしゃくしゃくかまわず続けた。「もちろん、ロイマン先生は別格だがね。どこに出しても恥ずかしくない大サンスクリット学者だ。しかし、それ以外は、およそ研究とは無縁の輩だ。連中の関心事ときたら、やれ豚肉が値上がりしたとか、今年の馬鈴薯の出来がいいとか。まるで農民同然のボンクラばかり。君もその同類でないことを願うがね。」海旭は反発を感じながらも、部屋のあちこちにうずたかく積まれた研究素材の山に圧倒された。多くはチベット語の仏教聖典で、聞くと、英国政府のインド局とベルリン大学を通じて手に入れた稀覯本だという。チベット語仏典だけではない。「瑜伽論」や「中観」

の梵語の関連資料もそこそ山とある。まさに汗牛充棟。大口を叩くだけのことはある。そんな仏教原典の中にあつて、日々使われている風情で研究机の中央に置かれた、大部の一冊が目にとまった。雲来が日本から持参し、この地でチベットや梵語の仏教聖典と漢訳とを同定する必要が生じたときに、世話になった大蔵経の縮刷版である。海旭の関心に気づいたらしくヴァレザーは言った。

「ああ、これか。日本に戻ったドクトル・タカクスに手紙をしたためて、送ってもらったものだ。簡便でなかなか便利で、中国ではなく日本で編まれたことには大いに敬意を表したいが、いささか物足りぬ。もっとも私の漢語の能力では、この程度でいいのかもしれないがね」

タカクスとは高楠順次郎のことで、海旭より十年前の明治二十三年（一八九〇）にイギリスはオックスフォード大学へ留学、サンスクリットとパーリ語を学んだ後、ドイツへ渡

りキール大学でギリシャ哲学とウパニシャツドなどを究めて帰国、現在は東京帝国大学で梵語学講座を創設して自ら講じている。

それにしても相も変わらぬ偉そうな物言いだが、確かにヴァレザーの指摘するとおりであった。それは雲来と共に使ってみてしばしば実感したところだ。正式には「大日本校訂大藏経」といい、明治一〇年代に高麗大藏経を元本に日本で編まれたもので、誤記も多々あるなど瑕疵があった。近代仏教学の成果を踏まえた仏教聖典の集大成があればいいのと幾度も思い、できなければ自分たちでつくると、雲来と言いいい合った。実は海旭は後にそのコンセプトのもと、高楠と共に、大正新脩大藏経を編纂し、宗教界の金字塔との高い評価を得るのだが、その機縁の一つはヴァレザーとの出会いにあったといっているかもしれない。

いきなりの大藏経の縮刷版をめぐるやりとりで、海旭の胸中でヴァレザー評価が早くも

逆転しつつあった。対人態度は傲岸不遜だが、研究態度はなんとも真摯実直ではないか。いったいこの男の学問的関心事は奈辺にあるのか。興味をおぼえて探りの質問を入れようとしたところ、ヴァレザーはそれを察したのか、「まあ、今晩は初対面だから、お堅い学問の話は脇へおこう、脇へ」とかわすとワインの栓をぬいた。「以前いたところはスイス国境の田舎町で、閑静で学問研究にはもってこいだが、酒が今一つなのが難でね。それに比べて、ここはすばらしい、ビールも旨いがアルザスの白ワインは絶品だ。たちまち虜になってしまった。さあ、挨拶がわりに一杯やろう」確かにアルザスの白ワインは、甘口のモーゼルワインに比べて、さっぱりとして切れ味がいい。これをうまいというのだから、ヴァレザーは間違いないける口だった。その上、ヴァレザーの酒は実に陽気で、盃を交わすうちに、海旭の胸中に蟠っていた反発はたちどころにとけていった。（この項つづく）

暑中お見舞い申し上げます

平成二十七年

浄土門主
総本山 知恩院 門跡第八十八世

伊藤唯眞

大本山 増上寺
法主

八木季生

大本山くろ谷金戒光明寺
法主

高橋弘次

〒606 825
京都市左京区田中門前町一〇三

大本山 百萬遍知恩寺

大本山清浄華院
法主

真野龍海

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

柴田哲彦

鎌倉市材木座六・十七・十九
TEL 〇四六七 (一一) 〇六〇三

法然上人御誕生地
浄土宗特別寺院

法主 誕生寺

〒709、362 岡山県久米郡久米南町里方八〇八
TEL 〇八六 (七二八) 二一〇二
FAX 〇八六 (七二八) 二一六二

浄土宗務総長

豊岡鏖尔

(学)大乗淑徳学園
理事長

長谷川匡俊

〒174、8645
東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園
淑徳S.C. 中等部高等部

理事長
校長 麻生諦善

大鹿山弘経寺前住職

金田進徳

〒302 0023
茨城県取手市白山二・九・二八

暑中お見舞い申し上げます

平成二十七年

白本尊阿弥陀如来

静岡
宝台院

住職 野上智徳

赤坂六地藏尊

浄土寺

住職 阿川正貴

〒107-0052 東京都港区赤坂四・三・五

鶏頭山安楽寺

飯田實雄

〒399-4115 駒ヶ根市上穂栄町九・五
電話〇二六五(八三)二二六〇

清水湊

忠高山
實相寺

〒112-0002 東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山
傳通院

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

家康公祖母の旧地

玉桂山
華陽院

住職 堀田卓文

勝願寺

〒365-0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八(五四一)〇二二七

お骨仏の寺

一心寺

〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪二・八・六九
電話〇六(六七七二)〇四四四

本應寺隠老

熊谷靖彦

〒849-1411 嬉野市塩田町馬場下甲六六二・一

九品阿彌陀如来

浄真寺

〒158-0083 世田谷区奥沢七・四一・三
住職 清水英碩

定義如来

極楽山
西方寺

〒989-3213 仙台市青葉区大倉字上下一
電話〇一一(三九二)二〇一一
HomePage: <http://www.johg.or.jp/>
E-mail: sanhou@johg.or.jp

岩淵

天王山
正光寺

東京都北区岩淵町三十二・十一

暑中お見舞い申し上げます

平成二十七年



「のらくろ寺」・「のらくろ和尚」

住職 **飯島英徳**

北海道室蘭市
満岡寺・善行寺
(0143) 22・4677・44・2695

梅窓院

住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

〒154・0017

世田谷区世田谷四・七・九

大吉寺住職

成田昌憲

願行寺

佐藤成順

〒140・0004

品川区南品川二・一・一二

森巖寺

加藤昌康

〒155・0032

世田谷区代沢三・二七・一

鎌倉大仏殿

高德院

〒248・0016 鎌倉市長谷四・二・二八
電話 〇四六七 (二二) 〇七〇三
FAX 〇四六七 (二二) 五〇五一

「御忌円成、ありがとうございます。」

蓮馨寺

住職・浄土宗議会議員 衆原恒久

〒350・0066 川越市連雀町七・一
電話 〇四九 (二二二) 〇〇四三
FAX 〇四九 (二二二) 〇六七六

光円寺住職

佐藤良純

〒112・0002

文京区小石川四・一二・八

光取寺

大室了皓

〒141・0021 東京都品川区上大崎一・五・一〇
電話 〇三 (三四四) 八三八四

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

● 声

〔特選〕
鯉耀る濁声響く魚市場

浜口 佳春

上り鯉である。江戸の頃と違って初鯉も早くなっている。いま市場では競りの真つ最中である。ほかと違って魚市場の競りは威勢がよい。向こう鉢巻きも居るのだろう。「だみ声」からいろいろ展開されて行く。

〔佳作〕 犬の名を呼ぶ声消えておぼろの夜

目黒 雄二

対岸に声しておぼろ倉庫街

遠藤 美智

声立てず気つかう日々や燕の巢

増田 信子

● 紋

〔特選〕
酒蔵の家紋耀く初夏の風

佐藤 雅子

鬼瓦の数尺下に大きく家紋が書かれ、酒の銘柄が、これも大きく書かれている。その酒蔵では幾樽もの酒がかもされている最中であ

る。初夏というから、飲めるまでにはまだまだ日数を要するのだが、家紋は耀いている。

〈佳作〉

息詰めておれば紋白蝶がくる

小林 苑子

紋付きの父母の写真に紙魚走る

石原 新

玻璃に浮くあまたの指紋菜種梅雨

池田 伊吹

●自由題

〈特選〉

花見酒注いでへなへな紙コップ

齊田 仁

花見の吟行会だろうか。酒肴その他一切を持つて出かける。コップは大方紙のものだ。それでも初めはしっかりしているのだが、盃を重ねるうちに紙だから弱ってくる。「へなへな」が一同酔い具合まで見せている。

〈佳作〉

橋いくつ潜れば海か花筏

三宅 月彦

二個買って老いし二人の柏餅

東 保

山蟻の歩む砂地の暑からん

山口 信子



誌上句会〈編集部選〉

■声

濁声の河鹿鳴く夜の最上川
球根に声かけながら植えにけり
こここと花の声して振り返る
死者の声はるかに遠近法のさくら
亡き人の声したような花吹雪
散り際に花の声して月あかり
春昼に浮く留守電の母の声
風に声あり春シヨール巻きなおす

佐藤雅子

月島恭子

鈴木真理子

長谷川裕

村松芳郎

鳥羽 梓

笠井亜子

袖岡愛美

■紋

春月や喪服の掛かる衣紋掛
紋付がずらりと並び春の寄席

斉田 仁

鳥羽 梓

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇一五年八月二十日

発表・『浄土』二〇一五年十月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-17-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■自由題

鳥曇り指紋のような地層かな
臘夜の指紋認証残高2円
縄文土器に指紋がひとつ花曇
家紋入り懐紙にすわる桜餅
雛壇に家紋質屋のウインドウ
紋別に友あり春の長電話
風紋の写真に春の日付あり
代紋の大看板や花吹雪
彫金の紋章重き春火箸

笠井亜子

三宅月彦

和田恆存

柏木貞花

井口 栞

仁科 玲

柴田 亮

金井小輔

内藤隼人

五加木めし脳裏は戦後駆け巡る

ただ桜見ている東京物語

橋あれば橋を渡りて花の道

バス会社車庫に花屑寄すところ

花ミモザ朝のパン屋が匂いけり

千年を立ちて観音像の春

一本のさくらひとつの断末魔

花びらに花びらをのせ水流る

花雲り午後の紅茶が甘すぎる

夜桜の下ゆくひとり千鳥足

花筏そこから先は小滝橋

さよならを言えずもじもじ花の昼

ベタ褒めにされて桜の散りにけり

入院の書類袍に花見会

佐藤雅子

笠井亜子

鳥羽 梓

金井 楨

和田恆存

三島正訓

横井幸宏

柏木貞花

内藤隼人

鈴木真理子

飯島舞美

赤坂 萌

大和田 晃

村松芳郎

古庭自由題

兼題

編集後記

梅雨永し何処に向こうか見えにくし 岱潤

昨年インターネット上で話題になった詩がある。埼玉県の詩人宮尾節子さんの作品で、もう八年も前の作品だ。それは、『明日戦争がはじまる』という詩だ。「ま

いにち 満員電車に乗って 人を人とも思わなくなった／インターネットの 掲示板の力キコミで 心を心とも 思わなくなった／虐待死や 自殺のひんぱんに 命を命と 思わなくなった／じゅんぴ はばつちりだ／戦争を戦争と 思わなくなった いよいよ 明日戦争がはじまる」四十年も昔、金岡秀友先生から仏教が説く人間の最も醜い心は、窃盗をする心

でも殺人をする心でもない、それは智度論で説く「無慚無愧」の心だ。隣の人のどんな状況にも、心が動かなくなった心だと教わった。

戦後七十年目の夏を迎える。それは日本が民主主義になっての年月であるはずだが、官房長官は多くの憲法学者の安本法案が違憲だという見解に対し、「数じやない」と言ってしまった。民主主義の根底からの否定だ。

今から思えば本誌『浄土』が発刊された昭和十年、日本が少しづつ戦争に向かっていった時代だった。その不安感の中で、先輩諸兄は法然上人という一人の人格者の鑽仰によって人々を結び、平和の心

雑誌『浄土』

特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大江田紘義(仙台・西方寺)
 加藤昌康(下北沢・森巖寺)
 熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光圓寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭行(大阪・一心寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回向院)
 松濤泰彦(芝・寶松院)
 真野龍海(大本山・清浄華院)
 脳 博之(網代・教安寺)
 水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

編集チーフ 編集スタッフ

長谷川岱潤
 斎藤光道
 佐山哲郎
 青木照憲
 村田洋一

浄土

八十一巻七月八月号 頒価六百元
 年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十七年六月二十日

発行 平成二十七年七月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了悟

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四丁目四明回会館四階

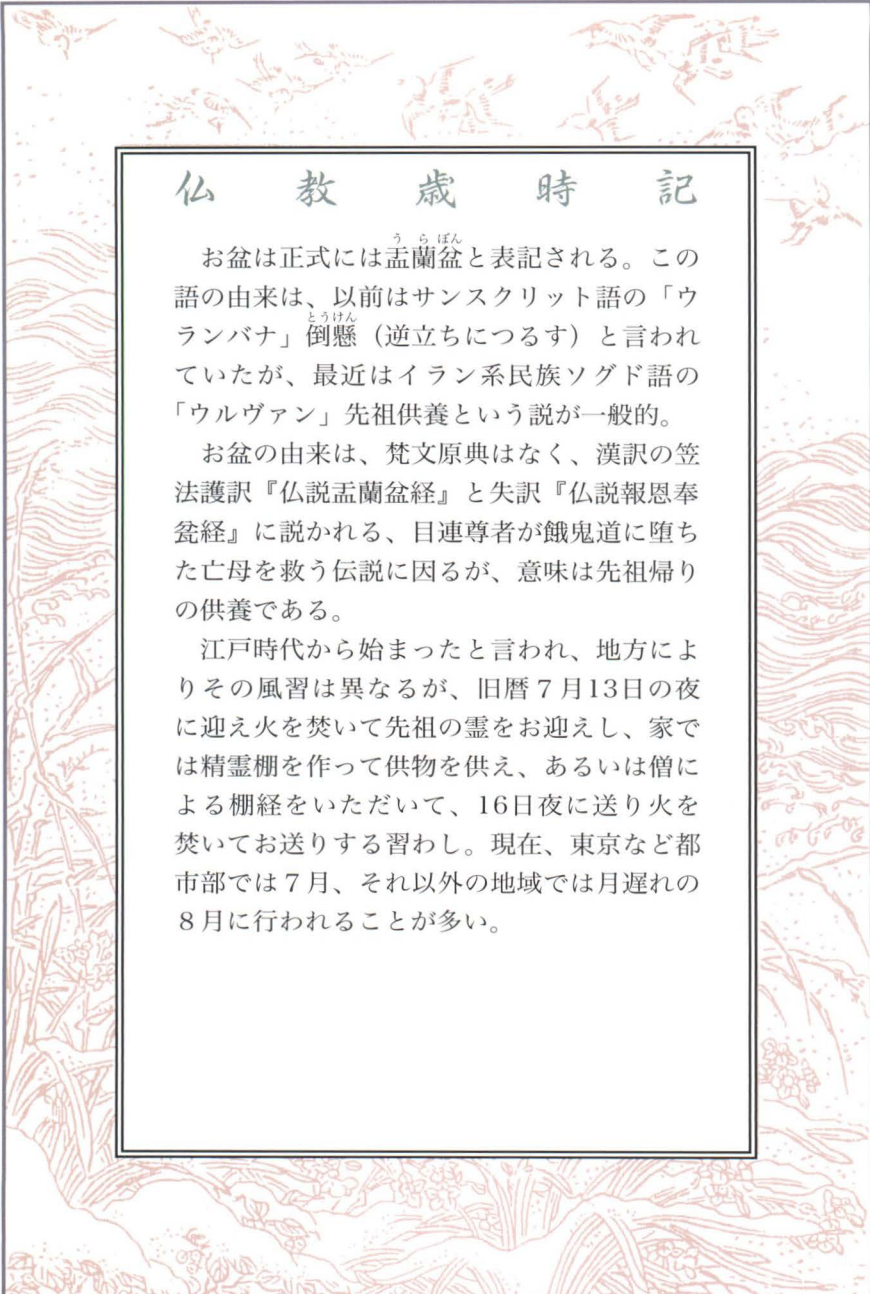
発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八六九四七

FAX 〇三三五七八六九四七

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

を具現化することを目指したのかもしれない。今日我々は何をするべきか、足踏みをしている時間はそう長くはない。(長)



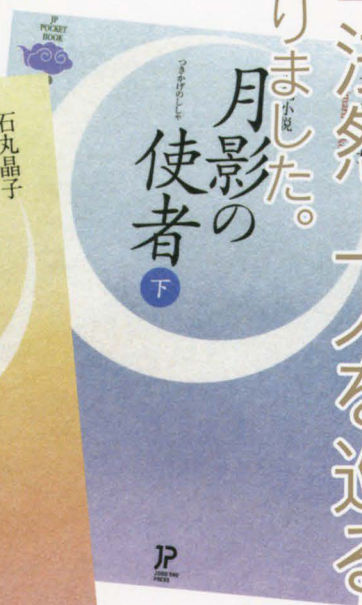
仏教歳時記

お盆は正式には盂蘭盆^{うらぼん}と表記される。この語の由来は、以前はサンスクリット語の「ウランバナ」倒懸^{とうけん}（逆立ちにつるす）と言われていたが、最近ではイラン系民族ソグド語の「ウルヴァン」先祖供養という説が一般的。

お盆の由来は、梵文原典はなく、漢訳の笠法護訳『仏説盂蘭盆経』と失訳『仏説報恩奉盆経』に説かれる、目連尊者が餓鬼道に堕ちた亡母を救う伝説に因るが、意味は先祖帰りの供養である。

江戸時代から始まったと言われ、地方によりその風習は異なるが、旧暦7月13日の夜に迎え火を焚いて先祖の霊をお迎えし、家では精霊棚を作って供物を供え、あるいは僧による棚経をいただいて、16日夜に送り火を焚いてお送りする習わし。現在、東京など都市部では7月、それ以外の地域では月遅れの8月に行われることが多い。

ほとけの
慈悲は
いつの世にも
誰のもとにも



石丸晶子先生の
本誌連載小説『法然上人を巡る人々』が
文庫本となりました。

法然。その光に出逢い、闇をこえ、
“あたらしいのち” に生きた
貴族、武士、庶民たちの物語

月影の使者 上 下

●浄土宗出版 上下巻とも本体730円＋税

〔問合せ・お求め〕 浄土宗出版

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4

TEL: 03-3436-3700 FAX: 03-5472-4878 <http://press.jodo.or.jp/>